◎当　番

自分のことだけで精一ぱいだった子どもたちも、生活になれてくると、教師の仕事を手伝いたがるようになった。おべんとうの時のおぼんくばりなど希望者が殺到して取り合うほどなので、そういう気持を満たすと同時に、ひとりひとりにリーダーシップをとる機会を与えたり、自律的な気持を育てるために当番をおくことにした。当番の仕事は、主に遊びや仕事のあとかたづけ、昼食前の用意とやかんの後始末、並ぶ時の先頭にもなり、組全体への連絡係や、その他必要に応じて教師の助手になったり代りになったりする。お当番のしるしのリボンはみんな一様に嬉しいらしいが、意識の点では個人差が大きい。先頭に並ぶ特権が主となる子どももあるし、当番の責任を全うしようという意気込の子どももあるが、概して、何かおとなになったような喜びで仕事を手伝う。当番であるのに遊具をかたづけなかったり、けんかをしたりする子どもに対するみんなの批判は手きびしく「お当番さんなのに……」といわれて自覚を促される。

×――×――×

思いつくままにあげてみたが、他の領域の中で、また行事的な活動の中で養われるものも多い。あげればきりがなく、まとまりがつけにくい。他の領域のように、とくに、この遊びで、この仕事でというようなものでなく、生活のどの場面ででも、あらゆる機会を捉えて育て養わなければならないからであろう。

触れ残した重要なことの中に、個人差の問題がある。組全体をみると順調な成長を示していても、個々の子どもの問題に立ちかえった時、問題を蔵したままで幼稚園期を過していく子どももある。成長と共に消える問題か否かも見極められずに。

「社会」についてこれから研究しなければならないことは多い。しかし〝幼児〟についての研究から更に一歩進んで、〝それぞれに違ったそれぞれの幼児ひとりひとり〟が、充分に力を発揮できるようにまで内容方法を研究していかなければならないと思う。

×　×　×

五才児

村田修子

「社会」は他の五つの領域のどれにも密接な関係があるので、これを中心にしてとなると、その広範囲なものの中からどの部面を、どのように取り上げたらよいのか、ということが案外つかみにくい。社会生活をするのに必要な、基本的な生活習慣といったような、一つ一つ分けられたはっきりとした具体的な内容もあるし、集団の中で協力したり自分を主張して社会生活を営んでいく為に必要な「言語」に含まれる事柄もやはり「社会」につながっている。このように考えていけば、絵をかくことも歌をうたうことも、すべてがつながりをもっているわけで、そのためにかえってつかみどころのないむずかしさを感じる。

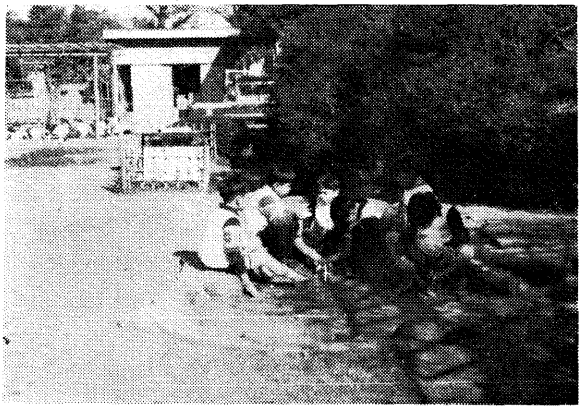
そこで、私の分担は五才児であるから、その

内容の一部面である五才児のもつ社会性というようなことを、この春卒業した人たちの普段の生活の中にみられたいろいろな「まとまった活動」をとおしてあげていきたいと思う。

その活動も、その組の持っているふん囲気によって毎年ちがう。そしてそのふん囲気は環境の中の人的環境、つまり教師に加えて幼児ら自身の構成メンバーによって、自然に独特のカラーがつくられていく。幼稚園では安定感をもって生活し、その中で自分を十分に出させることを一つのねらいとするために、組をかえたりすることは余りしない。そのこと自体はよい点が多いが、また一面からみるとこわいと思うこともある。だから、いつもその組の集団活動の傾向や状態について評価をしてみるが、この「ふん囲気」というものがたいへんに影響があることを感じる。これは当然のことであるが、この三月卒業した人たちについてもこれを強く感じた。

まず組の傾向をあげてみると、十八名の女児が、いわゆる女の子らしく、口数が少なくておとなしいので、何となくものたりない感じであったし、男児十八名にしたところで、「何かすすんでやる人」というようなもちかけをした場合にいつも積極的に出る人は二人ぐらいで、あとは首をかしげて「できるかな」というような態度をする。いろいろに励ましを与えたりしてやるとやっとやり出す。という状態で、全員をまとめて扱うのはやりやすいが、何となく、どうにかなってもらいたい、という気の弱さを感じる人が多かった。子どもの側の傾向はこのようであったためにひどいけんか、というものは余りみられず、自分たちで遊ぶということがたいへんよくできた。その上「遊びつつその中でいろいろの経験をさせるようにする」というやり方を主にしてきたことも影響して、私のはいる余地がないように遊びが展開されていた。

ひと遊びすんで池の中で相談



そして、その遊び方も、たいてい七、八人のグループで、子どもらしい夢の中に、現代っ子らしい現実的なものをも織りまぜて、「よくまあこのように遊べるものだ」と感心してしまうくらいであった。いろいろの経験をしている私ですら、よいことだと分っていながら「これはこうして続けさせておいてよいものだろうか」と信念がぐらつくような手もちぶさたを長時間味わうことが多かった。

こういうふん囲気ができたのは、ほかにも原因があると思う。その一つに、M君の影響力が多分にあったように感じる。

M君は四人兄弟の三番目で、家では上と下から圧力がくるが、自分がそれをさけたり、だきょうするために争うことなく過している。園では一応何でもするが、一人ですることには一応首をかしげるほうである。が生れ月が早いために生活態度も落ち着いているし、

明るくおだやかなので人に好かれるタイプである。見ていると、人の言ったことを余り聞き入れてやってしまうので、はがゆい感じもするが、何かあったときにはさけたり、うまくまとめてしまう。その為にM君がはいると遊びがおもしろくしかも長く続く。それがだんだんほかの人にも影響して、M君がぬけても、その遊びはくずれることなく続けられるようにまでなった。また途中で遊びがこわれたとしても、そのメンバーのまま、またすぐ違う遊びにかわっていく相談などもうまくやられた。

そのまとまった遊びとしては、比較的規模の大きい「ままごと」や「のりものごっこ」のほかに、組の三分の二ぐらいの人数が参加して「少年たんてい団ごっこ」や、みんな犬になってはいまわったり、走りまわったりする「わんわんごっこ」がやられた。

そのほか一年中「おすもうごっこ」「リレーごっこ」紅白に分れた「ボールとり」（みんなはこれをラグビーとよぶ）「はじめの一歩」という鬼あそびがやられていた。

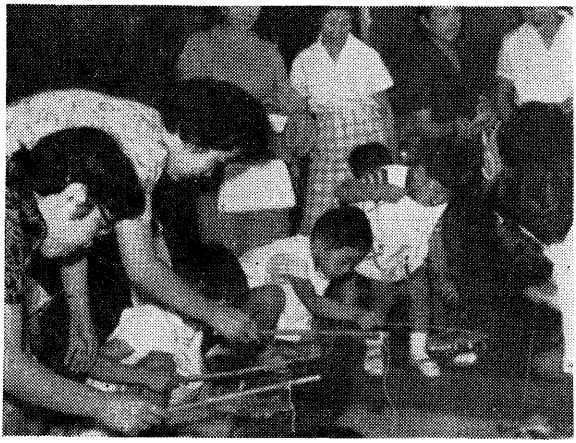
五才児ともなると、相当いろいろの制約のある遊びや組織だった遊びを受け入れることができるようになっている。だから教師のもちかけかた、というものが大切になってくる。

例としてリレーごっこの経験をあげよう。

今までも時期になると、関心のある何人かによってやられていたリレーを、秋の運動会のとき、全員が参加するように種目に加えてみた。距離は、小学生が二名で一周するところを三名でまわるようにした。今まで多くは折り返しリレーをしていたために、最初はバトンをもらって反対に走り出す人も三名ほどいたが、すぐなれて運動会のときは、走る人はもちろん、応援する小さい人たちもむちゅうになった。それは何だか大きい人たちの仲間入りができた感じでとてもうれしかったとみえて、それ以来ひきつづきあきることなくやられ、冬の寒い日でも外で行なわれていた。

お母さまといっしょに「とりっこ」

お母さまをつりぼりへ御招待



これは、組単位ではなく、四才児もまざり、男女の区別なく二、三十人も集まって、いつも自分たちだけで始められた。この場合は多く折り返しリレーであるが、みていると競争しようとする余り、出発線が一人ごとに前にはみ出していって、ついには折り返し点のすぐ前になってしまっては解散しつつやられていた。私たちは「際限なく繰り返し繰り返し走っているから、段々に距離が短かくなってちょうどいいこと」と話しあっていたほどあきずにやられていた。これなども、六組あれば、とかく組別の活動の多い中で、みんなをむすびつけるよい機会であったと思う。

とりたててむずかしいことをする必要は少しもないけれども「この人たちにならできる」と見極めのついたことならば、やってみると案外いろいろの収穫があるものだ、という経験をすることができた。もちろん、この見極めるための物指しが大切な点であることを忘れてはならないが……。

また、前にあげたどの遊びをみても何らかの形で一般社会の動きが反映されている。去年中心にとりあげて書いた「おすもうごっこ」にしても、皆のなりたい力士の名前が、その時期々々の有望力士の名であることなど、それにつながるおもしろいことであると思った。

そのもう一つの例として、これは三才児たったときのことであるが、その頃はテモということばが新聞やテレビでよく報道された。「〇〇はんたい」ということばがよくきかれた。案外リスミカルなひびきを持つこのことばは、すぐ子どもたちの心をとらえたらしく、初めはおとなのするそのままをまねていたが、ある日、そういうふん囲気になっていたとき園長先生がへやの中へ顔をみせた。とたんに、にこっと一人が笑ったと思うと、「えんちょうはんたい」とやり出した。それにあわせてみんなが声をそろえてどなり出した。その時は少ししてから何とかおさまったが、そののち半年以上も、園長先生の顔をみるたびに、ところかまわず「えんちょうはんたい」が愉快そうに始められて、私をあわてさせた。

卒業の思い出にふけっていると「いつのまにか、あれもいわなくなったな」と思ったとき、見ていないようでいて、世の中の動きに敏感な幼児の時期というものをしみじみと感じた。だから五才児ともなれば、一般事象についての話しあいや、子どもの中から出てくる科学的な話しについても、適当な話し相手になれる先生でなくてはならないと思った。

自分たちでじょうずに遊んだ反面、まとまった活動も扱いやすい組であったので、いつの年よりも全員でする集団遊びをよくやった。これがまた楽しそうに、みんなが気分を盛りあげてやったことはこの組の特徴であったと思う。恥ずかしがりが多かったことは、常に接しているおとなの側にもそれがあるように思ったので、遠足やごっこ遊びのときなど、折をみては親子共に遊ぶ機会を作るようにした。保育が最後という日、親の希望によって参観のときをもったが、あいにく寒い日であったので、子ども対親、のゲームをいろいろとやった。走ることなどは、もう余り差がないので、両方ともおかしいほど真剣にやった。人数の関係で半分ずつするときには、予想を裏切って、子どもは子どもの側に声援をおくっていたことも、成長を感じさせておもしろかった。

ふりかえってみると、初めから終りまでよく遊んだ組であった、という一言につきるほどだ。けれど後悔はしていない。

富樫純子

五才児は一年乃至二年間、幼稚園生活を経験しているので、個人生活、社会生活の望ましい習慣や態度及び、簡単な社会的なきまりは、或る程度身について実行できるようになつている。が、一方においては、なれからくるゆるみや、何かに夢中になって忘れたり、知っていてもそのまま過そうとしたりすることもあるので、常に子どもたちの様子や、折を見ての指導が必要である。なお、だんだんにふやしてゆく習慣やきまりもあるので、教師は常に努力して望ましい方向に仕向けることが大切である。

具体的な実際の指導や、実態については、一つ一つあげることはできないので、その中の一端を思いつくままにいくつか示してみよう。

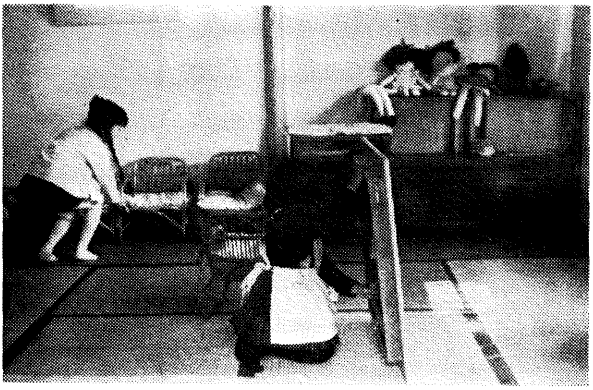
まず、年長組になっての始めは、子どもたちは大きい組になった自覚を持ち喜んでいるので、それをのばし、小さい友だちと仲よく遊ぶことや、遊具を分けあったり、ゆずったりして使うこと、困っている時には、助けてあげることなどを指導した。新しい友だちにおもちゃをつくっておくったりもした。

次におとうばんについて考えてみよう。これは五才児の大切な指導の一つであるので、少しくわしくのべてみる。四才の後期よりおとうばんを実行していたが、この頃は準備期で、年長組になって本当におとうばんの活躍、意義が深められると思う。きまりを守る、責任を持つ、相手の立場になって物事を考える機会を持つ、協力心を養い、独立する心を持つなど、おとうばんを喜んでしているうちに、これらのことが自然に身につき、理解されるわけである。

おとうばんは男女一名ずつで、保育室に各個人のおとうばん表を出しておき、その日のおとうばんがわかるようにしておく。おとうばんはリボンで印をつける。おとうばんの仕事としては、教師の手伝をして、おべん当のしたくをする。机をふいたり、おぼんやおべん当をくばる。使ったやかんを用務員室まで持って行く。かたづけのとき、中心になってかたづけをする。帰りのときはかたづけの見まわりをする。おべん当のとき「いただきます」帰りの「さようなら」のあいさつをみんなの前に出てする。その他、花だんに水をやったり、小さい花びんの水かえ、飼育物の世話の手伝などをする。音楽リズムなどで並ぶときや、体操のとき、帰りのときは先頭にな

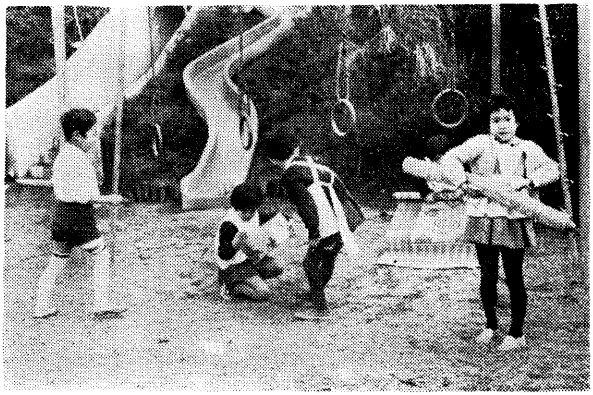
花に水をやるおとうばん

る。その他、時に応じてできることをする。おとうばんの仕事も子どもたちと相談してふやしていったが、何と言っても、おとうばんはおべん当の仕たくの手伝がとても嬉しいらしく、水曜と土曜はおべん当がないため、おとうばんに当った子どもがつまらながるので、子どもたちの発案により水曜と木曜は同じおとうばんにし、土曜と月曜も二日することにした。おとうばんは楽しみに待っている様子で、おとうばんがすんだすぐの日から順番の名札を次は何日かと数え、二日間できる日に当ると、なおいきいきとして活動していた。協力性の少ない男児Aは、おとうばんのとき、お友だちがなかなか協力してかたづけてくれなくて困ったので、次からは自分も協力するような態度になったり、人の前に出て来ては恥ずかしくて話のできなかった男児Bは、みんなの前でおべん当のあいさつをした事がきっかけでだんだんに自信をもって恥ずかしがらずに発表できるようになった。もちろん個人差のある子どもたちなので、おとうばんのときでも各個人にあった教師の仕向けと、環境を整えるということが大切な要素になってくる。



子どものうちのかたづけ

帰りに共同の場所のかたづけをするというのも年長二組で実行した。主に遊戯室は他の組で、「子どものうち」のかたづけはこの組でしたが、毎日一生懸命にかたづけていた。砂場などのかたづけも、遊具だけでなく、だんだんまわりに出た砂まで、シャベルでよせ



遊んだあとのかたづけ

砂場に入れたり、手洗い場の下の砂まできれいにして、もう後はおとながするからと言ってかたづけを打ち切るときも出るくらいであった。

友だち遊びグループ遊びが活発になってき

ているので、グループの中で役割をきめ、遊びを発展させ、計画的に遊びを運ばせるようにも心がけた。ルールをきめ、役割を交代して、遊びや仕事をするような経験も持たせた。リーダーが固定してしまったり、ボス化したりしないように、また消極的で自己主張ができない子どもは、機会をのがさないで指導するようにした。自己中心性の強い子ども、遊具をなかなか他人にゆずれない子ども、乱暴に扱う子どもなども根気よく指導の機会をのがさないように気をつけた。何か遊びをはじめるときや、何か仕事をするとき自然に、お互に肩をくんで頭をよせ合って、相談して話し合ってきめるようになった。問題の解決もできるだけ子どもたちの間でするように仕向けたが、教師はその解決を見守るように留意した。

何をするか相談

じゃんけん

幼稚園のいろいろの行事に参加したことも見逃せない経験であった。毎月のおたん生会、子どもの日、クリスマス、ひなまつりなどの集り、遠足、運動会など。

運動会のときにリレーをしたため、子どもたちはリレーがとても好きになり、自分たちだけでも遊び始め、組の大部分が参加して遊ぶという場面もたびたび見られた。リレーはルールを守って遊ばなくてはおもしろくないので違反すると批判するようになった。

子ども動物園に見学に行った後は、動物園ごっこに発展させ、協力し分担して、動物をつくったり、おみやげ物をつくったり、自分たちの乗って来たお猿の電車やモノレールを共同で相談してつくったりして、幼稚園中の友だちをよぶ機会をもった。動物園開園の日の子どもたちは本当に生き生きと積極的に活躍しとても喜びよい思い出になった。

三月のひなまつりは、年長二組で計画して集りを持った。当日はお母さま方もおよびして、司会も子どもたちでし、協力して、楽隊や劇あそび、ペープサートなどを発表し、楽し

動物園ごっこのおさるのでんしゃ

い会を持つことができた。劇あそびの筋を相談してつくったり、それに必要な小道具も協力して準備し、プログラムをかくことも子どもたちみんなでした。共通の目的をもって力を合せるという経験が貴重であったと思う。

この一年間の子どもたちの経験したことをあげればきりがないが、こうしてふりかえってみて、幼稚園の場合、いろいろな経験全部が社会の領域に関係があり、むすびつくといってもよいくらいである。毎日毎日をできるだけ、子どもたちの発達段階を考え、個人やそのクラスにあうような指導に努め、有意義に過すことが大切だと認識を深めた次第である。

幼児の教育　第六十二巻　第六号
六月号　Ⓒ　定価六〇円
昭和三十八年五月二十五日　印刷
昭和三十八年六月　一　日　発行
東京都文京区大塚町三五
お茶の水女子大学付属幼稚園内
編集兼発行者　津　守　真
東京都文京区大塚町三五
お茶の水女子大学付属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会
東京都板橋区志村町五
印刷所　凸版印刷株式会社
東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京一九六四〇番

◎本誌ご講読についてのご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。